

想定の対象はどこにあるのか？

— マイノングの把捉論からのアプローチ —

小関 健太郎

何かを想定することは日常的な経験である。そして想定される何かはしばしば、何らかの対象に関する事柄である。本論文では、こうした想定の対象の位置づけを想定についてのマイノングの理論を軸に考察し、その分析の方法論と 2 つの有用な基準を提示する。まず、想定の対象が「どこに」あるのかという問題は、対象と想定の主との志向的關係のもとで分析することができる。そして、想定の対象の位置づけには、認識論的な一様性と存在論的な一様性という基準を与えることができる。これらの枠組みの有用性を評価するために、想定に類する心理的態度とその対象が扱われている別の具体的な理論としてウォルトンによるふりの理論を取り上げ、マイノングの理論との比較を通じて両者の差異を検討する。

1 はじめに

『想定について』(Ann. II)においてマイノングは、広い意味での対象の認識における、すなわち対象の把捉 Erfassen における想定役割と、その対象との関係を論じている。本論文の目的は、マイノングの理論の検討を通じて、想定の対象がどのように位置づけられうるのかを論じることである¹。

この論文の構成は次の通りである。まず、問題を整理し、志向的關係による問題の定式化を提示する(2節-3節)。これに基づき、マイノングの想定理論を対象の位置づけに関して整理する(4節)。4節の検討から、位置づけのひとつの基準となる認識論的な一様性と存在論的な一様性の概念を提示する(5節)。一様性の概念を具体的に検討するため、マイノングの想定理論をウォルトンのふりの理論と比較する(6節-7節)。

結論だけを取り出せば、次のように要約される2つの主張を、以降の考察を通じて擁護されるものとしてあらかじめ示しておくことができる。(1) 想定の対象が「どこに」あるのかという問題を定式化するひとつの方法として、想定の対象の志向的關係における位置づけを検討することができる。(2) 位置づけの区分として、次の基準が考えられる。(a) 認識論的な一様性。任意の心理的態度において、対象の存在・非存在にかかわらず、図式的に同一の志向的關係が何らかの対象に適用されるか？(b) 存在論的な一様性。任意の心理的態度において、対象の存在・非存在にかかわらず、当の対象が志向的關係において同じ位置を占めるか？

2 問題と背景

2.1 想定の実例

最初に、以降の考察をテストするために適当と思われる「想定」の実例を検討し、いくつか提示しておきたい。検討に見通しを与えるため、志向性動詞に関するチザムの表現にならって、次のような文の形式を考える²。

(P) Sは ϕ ということを想定する

想定の実例として何が適当であるのか、あるいは何を想定することができるのかということは、 ϕ に入る節として何が適当であるかどうかを検討することで整理できる。例えば、以下のような実例が典型となるだろう。(1) 事実的または可能的な事態の想定。最もありふれた想定の実例は、可能的な事態の想定である。「アトランティスが存在する」のような反実仮想や、「明日私が着る服の色は赤色である」のような未来の事態を表現する文は ϕ に入る節として適当である。こうした事態はそれが現に事実であっても想定できる。「ピサの斜塔は3.99度傾いている」という事態の想定は、ピサの斜塔の実際の傾斜が何度であっても可能である。(2) 不可能な事態の想定。「永久機関が存在する」のような物理的に不可能な事態や、「円形の四角形が存在する」のような論理的に

不可能な事態を表現する文も ϕ に入りうる。(3) 抽象的对象についての想定。想定は実在的な対象についてのものに限られない。数学的な想定はその例であり、「変数 x の値は2である」ということを想定することが可能である。

実際のところ、「想定する」や多くの志向性動詞がほとんど任意の節を ϕ に入る節として許容する。しかしながら、いかなる志向性動詞も任意の ϕ を許すというわけではないだろう。例えば、「S は「変数 x の値は2である」ということを想定する」は可能である一方で、ある種の志向性動詞においては、例えばチザムは知覚の「見る」を志向性動詞として認めるが、「S は「変数 x の値は4である」ということを見る」は不可能であるように思われる。そして、おそらく「想定する」は真に任意の文を許容する志向性動詞である。

様々な具体的な体験のうちで何が想定と呼ばれるのかということは、想定 of 定義や理論に依存する。さらに、「仮定」や「仮想」、「想像」といった語や、異なる言語の対応語で意味されることとの区別も問題になる。しかし「想定」が厳密に言ってどのような意味であるにしても、ここで例示したような事例やその他の事例は、このような文の形式において適当であると認められるなら、その限りで想定に類する体験の事例としてさまざまな想定 of 理論のもとで検討することができる。また、想定 of 性格を検討する上で重要な志向性動詞として、「判断する」を4節で取り上げる。

2.2 想定 of 対象の位置づけの問題

ここで本論文の主題として提起されるのは、こうした文に現れる「ピサの斜塔」や「永久機関」といった名辞が(少なくとも見かけ上)指示する対象が、「どこに」あるのか、という問いである。

対象が「どこに」あるのかを決定する素朴なひとつの基準は、対象 of 地理的・空間的な位置である。この基準において、例えばピサの斜塔はイタリアにある、と答えることができる。ある種の抽象的な対象、例えばピサの斜塔 of 重心はピサの斜塔同様に特定の空間的な位置を占めるだろう。

想定 of 対象は地理的・空間的な位置をまったく欠くこともある。例えば、私たちは三角形が2つあることを、あるいは千角形が2つあることを、必ずしも

具体的な図形をイメージしたり紙に書いたりすることなしに想定することができるが、このとき三角形や千角形は地理的・空間的な位置を（「どこに」という問いに答える仕方）で占めるわけではない。地理的・空間的な位置を基準とするなら、ある種の対象はどこにもないということになるだろう。

地理的・空間的な位置をもたない対象は、いかなる基準でも「どこに」あるかを問うことができないのだろうか？ 想定の対象が「どこに」あるのかということであらゆる対象に共通した仕方では問うためには、もしそれが可能であるなら、より一般にその基準が適用しうるような定式化の工夫が必要になる。次節では、このことが志向的関係を考えることによって有意義に可能であることを論じる³。

3 志向的関係による問題の定式化

3.1 志向的関係における対象の位置づけ

前節では、想定の対象が一般に「どこに」あるのかを問うことに関して、問題の定式化に工夫が必要であることを論じた。本節ではこの問いを、対象の位置づけに関する、志向性テーゼに基づく枠組みを用いて定式化する。実際のところ、現代的な志向性理論の初期の展開は、前節で問題となった実在しない対象の志向的な位置づけと密接に関わっている。そこで、志向性理論の哲学的な展開を整理しつつ、想定の対象の位置についての枠組みを取り出す。

志向性と志向的内在。 まず前提として、再びチザムの用語法に負いつつ、志向性テーゼを次のように簡単に定式化する⁴。

(INT) 心理的態度は何かについての心理的態度である

この志向性テーゼは、ブレンターノによる「志向的内在」に対する注目に端を発する。よく知られているように、ブレンターノは次のように「志向的内在」を論じている。

「すべての心的現象は、中世のスコラ学者たちが対象の志向的 (または精神的) 内在と名づけたもの、そしてわれわれが内容〔対象〕との関係、対象への方向 (ここで対象というのは実在性の意味に解すべきではない)、あるいは内在的对象性と名づけるところのものによって特色づけられる。すべての心的現象は、そのおのおのが同じ仕方においてではないにしても、対象としてのあるものを内に含む。表象においては、あるものが表象され、判断においてはあるものが承認されるか否認されるかいずれかであり [...] 欲望においては何か欲せられる」(Brentano 1973, 124f.)⁵。

ブレンターノによるこの一節から引き出されるひとつの問題は、心的現象という心的なものが対象をその「内に含む」とはどういったことなのか、という問題である。例えば、ある人が窓の外に塔が赤いと考えるとき、その塔は心的現象の「内に含」まれるところの対象なのだろうか。塔それ自体はいかなる意味でも心的な部分ではないということを認めるならば、そのような主張は受け入れがたいものであって、この説明は——少なくとも補足なしには——難点を抱えているように見える。

内容と対象の区別。 この点に関してトファルドフスキは、『表象の内容と対象の理論について』(Twardowski 1894)において、ブレンターノがほぼ同義的に用いていた「内容」と「対象」の区別を明確に導入した。つまり、トファルドフスキによれば、体験の主体において内在する内容と、主体に対して外在的な対象とは区別される。対象から区別されるところの内容は、トファルドフスキの説では、対象のある種の模像、あるいは(写像による)像である。したがって塔の例であれば、塔が赤いと考えるという体験における内容は主体の心的な部分であるが、塔そのものは心的なものとは独立の外在的なものである。先々の難点は解決される。

ここで問いに戻れば、このトファルドフスキによる整理によって、想定の対象が「どこに」あるのかという問いのひとつの定式化がひとまず可能になる。すなわちこの場合、想定の対象が「どこに」あるのかということは、主体との志向的關係において対象がどのように位置づけられるのかということである。

3.2 志向的關係の図式

ここで、志向的關係における対象の位置づけは、次節で述べる一定の留保のもとで、次のような図式によっても表すことができるだろう⁶。



図1 把捉の図式

無対象的表象の問題。 しかしながらこの図式のもとで、トファルドフスキ自身も論じているように、対象が実在しない場合についてはどのように説明されるのか、といういわゆる無対象的表象の問題が表面化する。つまり、実在する塔について赤いと考える場合には、実在する塔を志向的關係において端的に位置づけられるが、これに対して例えば実在しない黄金でできた山が輝いていると想定する場合には、この実在しない山がどう位置づけられるのかは自明ではない。この問題に関してトファルドフスキは、内容と対象の区別を利用することで、実在しない対象も対象として表象されるという主張を明確に打ち出しているが、そのような表象における内容と対象の具体的な役割や位置づけの説明には課題が残された⁷。

マイノングは論文「高次の対象とその内的知覚との関係について」(*G. h. O.*)において、トファルドフスキによる内容と対象の区別を参照しつつ、無対象的表象の問題について独自の説明を与えている。その後論文「対象論について」(*Ü. Gegth.*)における対象論の確立を経て、マイノングはこの問題についてのより整合的な見方に到達した。この見方が、『想定について』第2版で展開された想定の理論である。そこで次節では、マイノングの想定の理論の展開と、そこで対象がどのように位置づけられるのかを論じる⁸。

4 マイノングの想定の理論

4.1 対象論と把捉論

対象論. マイノングが構想した対象論は、対象概念を対象の存在や非存在によって限界づけず、「対象の全体」において対象を探究する学である⁹。想定の対象にも関連することであるが、この構想から帰結するマイノングの理論の独自性は、彼が実在しない対象にも「非存在対象」という対象の地位を——非主観的所与としての「存在しない対象が「ある」([In diesem Sinne] “gibt es” auch die Gegenstände, die nicht sind) (Ü. *Gegth.*, 79) ということ——認めたことである。つまり、次のことが主張されている。

(M1) 存在しない対象は、非存在対象という対象として非主観的に認められる

対象 *Gegenstand* のクラスとして、マイノングは、事物的対象である客体 *Objekt* に加えて、事態的对象である客態 *Objektiv* を認める。想定や、後述する判断は、直接的には常に客態の想定や判断であり、間接的に客体や客態についての想定や判断である。想定や判断と客態の関係は重要であるが、経験においては客体が普通主題的であり、例えば「雪がある」と判断するとき、関心の自然な着目は雪という現象である (Findlay 1963, 68; cf. *Ann. II*, §8)。本論文でも、(INT) や図式において定式化しているように、それについて想定がなされるような客体を対象として問題にする。

把捉論. マイノングはまた、対象論の確立の以前・以後を通じて、広い意味での認識、すなわち対象に対する関わりを対象の把捉として論じている。「対象の把捉」は、われわれが対象に関わるという基礎的な経験である。志向性はあくまで判断や想定といった体験全体において考えられなければならないが、『想定について』においてもやはり、内容と対象はその志向性のうちである種の関係に立っているとされる¹⁰。先の図式においても、こうした図式が把捉論や志向性理論のすべての内実を表現するわけではない——例えばいわゆる作用 *Akt* の契機がそうである——ことには留保が必要であるが、このような意味である種の関係は表現されているだろう。

4.2 把捉における想定

『想定について』は、「想定」という体験に着目しつつ、この把捉論を主題的に論じている。『想定について』において想定に与えられている説明は以下のように整理できる¹¹。

- (A1) 想定は確信 *Überzeugung* や信念 *Glaube* を欠いた判断と同等である
- (A2) 想定は判断や感情の構成的部分である
- (A3) 想定は実際感 *Ernst* を欠いた判断と同等である

『想定について』における「想定」の説明が単一の体験の複数の側面を述べていると言えるのか、それとも実際には異なる体験を述べているのかについては早くから議論や批判があるが、ここでは少なくとも Findlay (1963) の初版以来特に重視されている (A3) に注目する¹²。実際感を欠くということの意味に関しては、そのような場合には人は確信や信念を「シミュレートしている」(Findlay 1973, 168) とも言われ、想定は同義的に、判断 (実際判断 *Ernsturteil*) に対置されて想像判断 *Phantasieurteil* であるとも言われる。

ブレンターノの記述心理学から継承された体験のクラスである判断、あるいは判断するという心理的態度は、命題的内容を有し、また肯定または否定の性格をもつという点で、もうひとつの体験のクラスである表象から区別される。想定と判断は実際感の有無によって相互に定義されるが、マイノングはこの対関係を感情体験を含む体験一般に拡大している¹³。したがって、(A3) を敷衍した次の2つのことも主張される。

- (A4) 想像体験 *Phantasieerlebnis* は実際感を欠いた体験である
- (A5) 体験には対になる想像体験がある

この一般化は、後述のウォルトンのふりの理論との比較において有用である。

4.3 対象の「擬似存在 / 存在」説に基づく位置づけ

内的知覚と擬似存在. 前節で取り上げた「内容」と「対象」の区別を導入する一方で、マイノングはブレンターノが示した内的知覚の概念を継承する。

ブレンターノによれば、内的知覚は心的現象の直接的知覚である。具体的には、例えば、怒りや悲しみといった自身の感情が、内省によらずわれわれに知られることは内的知覚の実例にあたる。また、表象や判断も内的知覚によって知られる心的現象である。こうした内的知覚は、色、音、暖かさといった物的現象の知覚である外的知覚と区別され、その重要な特質は明証性にある。つまり、色のような感覚的性質によって実在についての確実な知識を得ることはできないが、他方で感情や表象はそれ自体で実在的であり、実在についての確実な知識をもたらす。この意味で、内的知覚のみが真に関わる厳密な意味での知覚とされる。

マイノングはブレンターノ同様に、知覚されるものが心的なものでありうるとともに、そのような知覚が固有の明証性をもちうることを認め、そのような知覚は内的であるとする¹⁴。しかしながら同時に、内容と対象の区別に基づいて、内的知覚の対象は表象や判断といった体験そのものではなく、外的知覚同様に内容に関係づけられた対象であるという立場を取る。内容を軸とした内的知覚の対象について、マイノングは次のような例を挙げている。

「〔例えば、〕私が窓から外を眺めて、内的知覚によって、生じていることを顧慮しようと努めるとする。2つの教会の尖塔、家々、木々、積まれた薪の山々、その他いろいろを私は見いだすが、どれもが「対象」である。このことは逆説的に聞こえるかもしれないが、可能な限り注意を払って検討するほど、なお「見られているもの」以外には何もないように思われる[...]」(G. h. O., 404. 以下筆者訳)。

つまり、マイノングによれば、心的な「見られているもの」の知覚がどのようなものであれ、われわれが見いだすのは「見ていること」ではなく、「見られている」しかじかの対象が内的知覚においてなお主観的に問題となるのである。このような仕方では、内的知覚においても対象が知覚される。しかしこのとき、

内的知覚において知覚される対象は何なのだろうか？

内的知覚の対象は、内容と対象の区別のもとでは内容に相当するように思われる。しかし、そもそも内容と対象が区別され、対象が認識されるものであると言われる以上、内容そのものを知覚することは困難である。ここにマイノングは、体験の一部ではないが内容に依存する、内容の知覚における「代理者」であるような対象として、疑似存在 *pseudoexist* する対象を認める¹⁵。

言い換えれば、先に述べたように、内容は体験の一部であるために実在するが、疑似存在する対象は体験の一部ではなく、端的には実在しないので、「われわれに表象される限りで」(*Erf*, 444) 疑似存在すると言われる。疑似存在の概念は対象論以前から用いられ、対象論の確立後もなおその存在論的地位は不明瞭であるが、少なくとも非存在対象として位置づけることはできる¹⁶。

想定の対象の「疑似存在」。 これらの前提のもとで、マイノングは想定による存在・非存在対象の把握の理論を立て、想定における対象と判断における対象を次のように位置づける。

「以下のように言うのはきわめてもっともな描写である。すなわち、潜在的であれ顕在的であれ、想定以上の何ものもそこには対象はこうした限界の内に留まり、ゆえに「内在的 *immanent*」である。しかし、正当化された肯定的判断が加わって想定を補う場合は、対象はこうした限界を越えて、いわば、現実の一部分に接している。しかも対象は、その現実の一部分と同一であるという意味で〔現実の一部分に〕到っており、したがってこの意味で対象は超越している」(*Ann. II*, 229)。

マイノング自身が注を付している通り、ここで内在的と言われているのは心的な内在の意味ではなく疑似存在を意味する。そして疑似存在する対象は、体験に依存するがその一部ではないような非心的な対象である。

この「疑似存在 / 存在」説によれば、想定によって把握される対象は常に疑似存在する対象であり、正当化された肯定的判断によって初めて存在対象が把握されることになる。したがって、存在の観点における想定は、対象の存在・非存在について無差別的ではあるものの、把握されるのは当の対象ではなく疑

似存在する対象である¹⁷。図式を示すならば、疑似存在する対象(疑似対象)を書き加え、内容と疑似存在する対象との間の関係を簡素化したうえで、次のようになる。

	対象が存在	対象が非存在
判断	内容 → 存在対象 □ → ○	内容 疑似対象 □ → ◇ ×
想定	内容 疑似対象 → 存在対象 □ → ◇ → ○	内容 疑似対象 □ → ◇ ×

表1 「疑似存在 / 存在」説における志向的關係の図式

この図式は、想定における志向的關係のひとつの説明を与えている。次項で見る通りマイノング自身がこの立場を修正したように、この説にはいくつかの難点があるが、私の考えでは、その一面は後述するふりの理論との比較によっても示唆される。

4.4 対象の「超在」説に基づく位置づけ

対象論的枠組みを取り入れた「超在」説の「疑似存在 / 存在」説からの理念的な変更は、「現実的なものを偏重する先入見」からの脱却である¹⁸。この変更は次のように述べられている。

「表象の対象性が完全に現実的であるのは、その表象が向くことができる対象が現実にある場合のみである、ということももっともらしく思われる。[...] この視点は、実際、この本の第1版における関連する私の議論に決定的な影響を与えていた。当時に比べて特に、対象論に固有の次のような見方を私は深めている。つまり、そのような(もちろん事実的な)存在への義務的な参照には、別の場所で私が反論を示したような「現実的なものを偏重する先入見」の思い込みが明らかに見て取れる」(Ann. II, 218)。

対象論における (M1) を認めれば、存在する対象も存在しない対象も非主観的なものであるという点で共通していることになる。この共通性のもとで対象の存在や非存在を度外視するとき、対象は純粹には存在や非存在の埒外にあるという意味で超在していると言われる。そして、どちらも超在するという限りにおいて実在対象と非存在対象は志向的關係において区別されない。したがって図式はごく単純になり、判断および想定が外的知覚に関する場合と内的知覚に関する場合とでそれぞれ次のようになる。

	対象が存在	対象が非存在
判断	内容 (存在) 対象 □ → ○	内容 (非存在) 対象 □ → ○
想定	内容 (存在) 対象 □ → ○	内容 (非存在) 対象 □ → ○
(内的知覚)	内容 疑似対象 (存在) 対象 □ → ◇ ○	内容 疑似対象 (非存在) 対象 □ → ◇ ○

表2 「超在」説における志向的關係の図式

この図式においては、想定の対象はその存在・非存在によらず常に同じ位置づけを与えられることになる。他方で、図式的に同一であっても、依然として判断と想定との差異は体験の別の契機である實際感によって説明できる。

5 認識論的な一様性と存在論的な一様性

5.1 一様性の概念

想定の対象の大きな問題は、それが存在することも存在しないこともいずれもありうるということである。「擬似存在 / 存在」説においては、想定の対象は対象の存在・非存在にかかわらず疑似対象であり、したがって疑似対象に関して図式における志向的關係は共通していたが、存在する対象の位置に非存在対象やそれに代わる対象が位置づけられることはなかった。これに対して対象の「超在」説に基づく対象の位置づけにおける転換は、対象論の導入によって

存在する対象と存在しない対象を同じ位置で扱うことにあった。これらの点を整理することで、対象の位置づけについての基準として、認識論的な一様性と存在論的な一様性が得られる¹⁹。

(認識論的な一様性) 任意の心理的態度において、対象の存在・非存在にかかわらず、図式的に同一の志向的關係が何らかの対象に適用されるか？

(存在論的な一様性) 任意の心理的態度において、対象の存在・非存在にかかわらず、当の対象が志向的關係において同じ位置を占めるか？

5.2 類比される理論

一様性の基準はどのような含意をもつのだろうか？この基準の利点は、この基準自体は、特定の理論を前提せず志向的關係の図式のもとで適用できることである。これまで示したマイノングによる想定 of 理論と類比的なものとして有力な仕方と比較されている理論に、同時代のフッサールによる中立性変様の理論に加えて、ウォルトンによるふりの理論があり、特に後者を論じている例として Kroon (1992) がある²⁰。次節では、特に本節での考察に基づいて、マイノングの想定 of 理論とウォルトンのふりの理論を比較することで、それぞれの理論が一様性という観点でどのように立場を異にしているかを明らかにする。

6. ふりの理論との比較のスケッチ

6.1 Kroon (1992) における議論

Walton (1973) におけるふり pretence の理論は、マイノングの想定 of 理論同様、体験とその対象という 2 つの境位を含んでいる。両者の類比を提示している Kroon (1992) が目的としているのは、非存在対象を認めるマイノングの主張が、非存在対象を指示する名辞を含む文についての真理を説明するためのものであるとする解釈、すなわち (クルーンによれば、いわゆるマイノング主義意味論の多くが与している) マイノングの主張についての「直接的解釈 Direct

「Interpretation」を批判し、よりマイノングの本来の考えに近い解釈として「想定に基づく見解 Assumption View」を——つまり前節の「超在」説に即した解釈を——提示することである。

この中で Kroon (1992) は、『想定について』を参照しつつ、マイノングの想定を Walton (1973) におけるふりと類比させている。特に、次のように Walton (1973) の記法が導入される。

「ケンダル・ウォルトンに従って、私は何であれこの種のふりの通用範囲において真であるものをアスタリスクの間に置くことにする (* () *)。マイノングの見解は、すると、黄金でできた山のような対象について考えごとをするためには、われわれはまず *[文脈的に唯一の] ある山が実在し、黄金でできていることを容認する*、つまり *黄金でできた山が存在することを容認する* 必要があり、そうしてわれわれは通常の論理法則によって *黄金でできた山は黄金でできており山である* ということを結論できる、というものである」(Kroon 1992, 509)。

Kroon (1992) の全体において「ふり」や「ふりをする」という語で意味されているのはウォルトンの理論におけるそれに限られず、クルーンはふりという括りでウォルトンだけでなくエヴァンズやサル、クリプキらの説にも言及している。しかしながら、論文において重要な議論は上の記法を用いて進められており、ここでウォルトンの理論は次に述べる理由でマイノングの想定との関係も明確なので、ここでは断りがない限りクルーンが主に参照している Walton (1973) および Walton (1978) を念頭にふりを扱うことにする²¹。

この「想定」と「ふり」の類比に関して、クルーンは2つの根拠づけを試みている。第一に、直接的には、クルーンは『想定について』における、想定についての「ふり」的な表現を——特に演技や演劇、フィクションについてのマイノングの議論を取り上げて——引き合いに出している。中でもクルーンが注目するのは「自身をしきじかのものが存在するような状況に置き入れる」(Kroon 1992, 506) というような表現で想定が言及されていることであり、クルーンによれば「想定することは、したがって、しばしばふりをするこ

ある」(ibid., 509)。

第二に、こちらはより間接的であるが、クルーンはマイノングの把捉論の「無対象的見解 No-Objects View」から「想定に基づく見解」への移行、すなわち前節で論じた対象の「擬似存在 / 存在」説から「超在」説への移行を、「純粋なふり pure pretence」の理論から「非純粋なふり impure pretence」の理論への移行と見なして、マイノングの想定理論を、純粋なふりの理論に非存在対象へのコミットメントが付け加わったものとして考えている²²。また、クルーンによれば、クリプキの説をはじめ、少なからぬふりの理論が実際には非存在対象に代わる(抽象的実在対象のような)対象についてのコミットメントを有しているが、ウォルトンの理論はこの点で例外的に、前者の純粋なふりの理論であり、「無対象的見解」=「擬似存在 / 存在」説に類比される²³。第一の根拠は弱い形の類比であり、想定の一つかの事例がふりの事例であることを述べるに留まっているが、第二の根拠は全面的な類比を可能にしている。

6.2 一様性による検討

存在論的な一様性。 存在論的な一様性に関する差異は、対象が存在しない場合に明白である。マイノングの想定理論においては空名によって指示される対象が対象論における(M1)により非存在対象として認められ、志向的關係において存在する対象と同じ位置に置かれる。これに対して、クルーンによる類比の第二の根拠として取り上げた箇所でも指摘されている通り、ウォルトンのふりの理論において非存在対象はいかなる意味でも認められない²⁴。したがって、ウォルトンの理論は存在論的には一様ではない。

認識論的な一様性。 しかしながら、存在論的な一様性を認めなくても、認識論的な一様性は擁護しうる。前述のクルーンの議論によれば、非存在対象を認めるかどうかという点を除いてしまえば、「擬似存在 / 存在」説のもとで想定はふりとなお類比的である。そしてウォルトンの理論においてふりがどのように定義され、どのような役割を果たすのであれ、それが具体的な体験として経験されるものであり、かつその体験に関して志向性テーゼ(INT)を認めるのであれば、対象に対する志向的關係を何らかの仕方で説明する必要がある。

ここでウォルトンの理論は、準感情による説明によって、非存在対象が問題となる体験における志向性テーゼを拒否しているように見えるかもしれない。ウォルトンによれば、少なくとも感情に関して、私たちは虚構の対象に対して真に心理的態度を取っているのではなく、いわば準感情という心理的狀態にある。例えば、恐怖に対応する準恐怖はそれ自体では心理的態度としての恐怖に満たないものであって、(1) 無対象的であり、(2) 対応する感情と生理学的には同様であるような心理的狀態である。そのような状態があることを認めれば、そもそも心理的態度についてのテーゼであった (INT) は準感情には適用されない。もしこれがすべてであるなら、もはやここで志向的關係を問題にすることはできず、クルーンの論じる想定とふりの類比は極めて表層的なものにすぎないことになるだろう。

しかし同時に、ウォルトンによれば、準感情は本質的に他の虚構的真理に関する信念によって「引き起こされる」ものである。準感情それ自体はふりでも想定でもなく、ふりをするはこの信念を抱くことである。このふりという体験に関して想定と同じく (INT) を認めるならば、純粋なふりの理論としてウォルトンの理論をマイノングの「擬似存在 / 存在」説に対応させるクルーンの解釈は、それが純粋なふりの理論における志向的關係の説明の唯一の可能性ではないとしても、可能かつ具体的なものである。ここで、ふりという体験に関する限りで、純粋なふりの理論は認識論的に一様である。例えば、(存在しない) スライムが近づいてくるといふふりと、(存在する) 泥の塊がパイである、というふりにおいては、どちらも擬似対象に対して図式的に同一の志向的關係が適用される (表 1)。ふりにおいては、対象の存在・非存在によらず一様な志向的關係が実現される。

しかしながら認識論的な一様性は真に任意の心理的態度において成り立つわけではなく、判断と想定 (ふり) の間では一様性は保たれない。つまり、対象が存在する場合であっても、それぞれの体験の性格に応じて当の対象と擬似対象が切り替わることになる。これに対して、対象の「超在」説に基づくマイノングの想定理論は、(M1) を認める代わりに認識論的な一様性を保っている。また、想像体験は準感情と共通の問題——例えば存在しないスライムを恐れることの説明——に関して適用できるが、準感情が他の信念に基づく帰結的なも

のであるのに対して、想像体験は実際感を伴った体験 (実際体験) と同等に自律的なものである²⁵。

7. おわりに

以上の議論から、いくつかの帰結が得られる。

さらなる理論と比較。 もたらされる洞察のひとつは、こうした基準をもとに、その他の理論も明確に位置づけて検討しうることである。例えば、認識論的にも存在論的にも同様であり、かつマイノングの想定理論とは異なるような理論として、ある種の全面的な反実在論を考えることができる。そのような立場では、対象はその存在または非存在によらず志向的關係のうちには位置づけられないか、志向的關係をまったく欠いている。この立場を構築する最も手近な方法はおそらく、ふりの適用範囲を全面的に拡大することである。

認識論的な一様性と存在論的な一様性の相互関係。 また、認識論的な一様性と存在論的な一様性にはどのような関係があるのかということも問題になる。この問題に関して、特に4節の議論に関連して誤解されてはならないのは、マイノングは把捉論における認識論的な一様性を説明するために対象論を導入したのではないということである。対象論の成立に認識論的な問題が影響を与えたことはもっともらしいことであるが、マイノングは対象論を注意深く認識論から分離している。

一様性の評価の問題。 最後の問題は、これらの基準のもとで、どのような立場が「よい」立場であるのかということである。特に、これらの基準のもとでそれぞれ同様であることには、理論にとってどのような意義があるのだろうか？例えば認識論的な一様性については、5節の注で述べた通り、それに相当する基準を Bell (1990) が積極的に擁護している。認識論的にも存在論的にも一様な対象の位置づけを与える理論は、経験と対象に関する統一的な理論のひとつの可能性を示している。

註

1. 本論文では想定の対象として、文によって表現されるような事態の対象ではなく、その文に含まれる名辞によって表現されるような事物的対象に注目する (cf. 3.1 節).
2. Chisholm 1957, Ch. 11. ここでチザムは志向的動詞として想定 *assuming* を主だって取り上げている.
3. 地理的・空間的な位置自体を有意義な仕方では問うことができないこともあるように思われる. 三角形は紙に書かれて机の上にあることが可能かもしれないが、11次元の多様体はどこにあることが可能だろうか？少なくとも志向的關係の図式においてはこうした対象も位置づけうる.
4. Chisholm, *loc. cit.* なお、マイノング自身は志向や志向性 *Intentionalität* といった用語を実質的には用いておらず、おおよそ前者に相当する語としては「思念 *Meinen*」を、おおよそ後者に相当する語としては「向いていること *Gerichtetsein*」を用いている.
5. 訳文は小倉 (1986, 79) によった.
6. ほとんど同様の図式を、マイノングは『我々の知識の経験的基礎について』において示している (*Erf.*, 440). 現代における、マイノングの把握論あるいは志向性理論についての類似の図式の例としても、Chrudzinski (2001, 127) や、特にマイノング主義意味論に関する文脈では Rapaport (1985, 80) が挙げられる. 志向性理論一般に関しても、例えばフッサールの説を説明している Smith (2007/2013, 199) が同じく内容と対象の間に矢印を引いた図式を示している.
7. cf. 江里口 1991.
8. 次節の議論は、6 節で取り上げる Kroon (1992) のマイノング解釈を掘り下げたものにもなっている.
9. *Ü. Gegth.*, 486. 本節の内容の一部は小関 (2017) に基づく.
10. cf. *Ann. II*, §43.
11. cf. 務台 2000, 35.
12. (A1) は推量と呼ばれることがふさわしいという批判がある (例えば Findlay 1963, 227–230). 想定を同様に (A3) の意味で取り上げている最近の議論として Mulligan (2015) や Textor (2015) がある. マリガンは (A2) を批判している.
13. cf. Findlay 1963, 226.
14. *G. h. O.*, 408.
15. Fisher による注釈 (*G. h. O.*, 476).
16. cf. Kalsi 1978, 27.
17. マイノングは明確に述べていないが、ここで想定は内的知覚から区別できないように思われる.
18. 『想定について』第2版では、ここで示した「超在」説と「擬似存在 / 存在」説はそれぞれ「超在の観点」、 「存在の観点」と呼ばれて論じられている.
19. 実際のところ、これらの基準はこれまでも散在的に見いだされてきている. 特に認識論的な一様性に相当するものは Bell (1990, 105–106) で「志向性の単一の説明 *single explanation of intentionality*」という呼び名のもとで擁護されており、これを受けて Simons (1995, 116) では同じ意味合いで一様 *uniform* の語が用いられている. さらにこれらを受け富山 (2009) でも「一様」や「一様性」といった表現が用いられている.
20. クルーン自身は自らの解釈について「標準的なものではない」 (Kroon 1992, 501) と断っている. 一方で、Kalsi (1996, 8) のようにマイノング研究者による支持も見られる.
21. クルーンが例外的に参照している限りで Walton (1990) も参照する.
22. Kroon 1992, 521.

^{23.} cf. Kroon 1992, 517, 517n.

^{24.} cf. Walton 1990, Ch. 10.

^{25.} Textor (2015, 293, 295) は想像体験と準感情の類比を示唆しているが、ここでの議論によれば類比は表面的なものである。

参考文献

- Bell, David. 1990. *Husserl. The Arguments of the Philosophers*. Routledge.
- Brentano, Franz. 1973. *Psychologie vom empirischen Standpunkt*. Ausgabe von 1924. Felix Meiner.
- Chisholm, Roderick M. 1958. *Perceiving: A Philosophical Study*. Cornell University Press.
- Chrudzimski, Arkadiusz. 2001. “Die Theorie der Intentionalität Meinongs”. *Dialectica*, 55(2), 119–143.
- Findlay, John N. 1963. *Meinong's Theory of Objects and Values*. Oxford University Press.
- . 1973. “Meinong the Phenomenologist”. *Revue Internationale de Philosophie*, 27(104/105), 161–177.
- Kalsi, Marie-Luise S. 1978. *Alexius Meinong on Objects of Higher Order and Husserl's Phenomenology*. Martinus Nijhoff.
- . 1996. *Alexius Meinong's Elements of Ethics*. Kluwer Academic Publishers.
- Kroon, Frederick W. 1992. “Was Meinong Only Pretending?” *Philosophy and Phenomenological Research*, 52(3), 499–527.
- Meinong, Alexius. 1969-1978. *Gesamtausgabe*. Ed. by R. M. Chisholm et al. Akademische Druck und Verlagsanstalt. [= GA.]
- Mulligan, Kevin. 2015. “Annehmen, Phantasieren und Entertaining. Husserl und Meinong”. *Grazer Philosophische Studien*, 91, 245–283.
- Rapaport, William J. 1986. “Non-Existent Objects and Epistemological Ontology”. *Grazer Philosophische Studien*, 25/26, 61–95.
- Simons, Peter. 1995. “Meaning and Language”. in B. Smith and D. W. Smith, eds., *The Cambridge Companion to Husserl*. Cambridge University Press, 106–137.

- Textor, Mark. 2015. “Meaning, Entertaining, and Phantasy Judgement”. *Grazer Philosophische Studien*, 91, 205–302.
- Twardowski, Kazimierz. 1894. *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen. Eine psychologische Untersuchung*. Höfler.
- Walton, Kendall L. 1973. “Pictures and Make-Believe”. *Philosophical Review*, 82, 283–319.
- . 1978. “Fearing Fictions”. *The Journal of Philosophy*, 75(1), 5–27.
- . 1990. *Mimesis as Make-Believe: On the Foundations of the Representational Arts*. Harvard University Press.
- 江里口 明俊. 1991. 「マイノングの対象論」. 『國學院雑誌』, 94(11), 47–57.
- 小倉 貞秀. 1986. 『ブレンターノの哲学』. 以文社.
- 小関 健太郎. 2017. 「マイノング『想定について』における対象の把握について: 図式のおよび論理学的研究」. 東京大学卒業論文.
- 富山 豊. 2009. 「フッサール初期志向性理論における「志向的对象」の位置」. 『フッサール研究』, 7, 61–72.
- 務台 理作. 2000. 「対象論と現象学(1933)」. 『現象学研究』. 務台理作著作集 1. こぶし書房, 9–105.

略号

- Ann. II: Über Annahmen*, 2. Auflage (1910) in *GA*. IV: XV–XXV, 1–384.
- Erf.: Über die Erfahrungsgrundlagen unseres Wissens* (1906) in *GA*. V: 367–481.
- G. h. O.: Über Gegenstände höherer Ordnung und deren Verhältnis zur inneren Wahrnehmung* (1899) in *GA*. II: 377–480.
- Ü. Gegth.: Über Gegenstandstheorie* (1904) in *GA*. II: 481–535.